

本校では読書会をやっています。他人の意見は面白い。気づかなかった部分を知り、より深く読める気がします。

今回は『刑務所の読書クラブ 教授が囚人たちと10の古典文学を読んだら』 ミキータ・プロットマン著 原書房 2017

著者は英文学の教授。両親とも教員だったが、反体制派で、兄も弟も失業手当をもらって過ごしているような家族の中、読書が好きで、一人奨学金でオックスフォード大学に入学するような変り種。刑務所で受刑者9人の読書クラブを運営する女性なんて、確かにユニーク。

大学の授業と違って刑務所では単位をとらなくてもいい、ただ純粋に読みたいから読む。刑務所生活には他に面白いものがないから、ともいえるのだけど。

基本ルールは失礼な態度は取らない、人の話を途中で遮らない、指定箇所より先は読まない、というもの。

**コンラッド『闇の奥』**で27ページまでよむのに44回も辞書を引く。ここで文盲率の高さに驚く。そうだが、アメリカで読み書きができるなんてかなりの学歴がないと無理だときいたことがある。今の生徒が少々おかしな文章を書いても、読み書きができるだけすごいと思ひ直した。アフリカの奥地にむかう主人公マーロウが人食い人種のことを考える。「君らはいつまでも続く飢えがもたらす邪悪な力、耐え難い苦痛、黒い想念、陰鬱な凶暴性を知ってるかい？俺は知ってるよ……こういう長引く飢えよりは愛する人との死別や、不名誉や、魂の地獄墮ちの方がまだ耐えやすい」

「このとおりだと思っただけ。腹が減るとまさにこうなる。ここにいるやつはみんなそう言うだろうぜ。」

教授「でも食事は出るでしょう？」 「確かに食事は出る。あれが食事っていえるならな。最初は前の暮らしを考えるんだ、7年もたてばそういうことはあまり考えなくなると、今度は友達や家族が恋しくなる。そして50年くらいになると食べものが最優先事項になるんだ。(略)テレビで料理番組を見るのを楽しみにしている。もう忘れてしまった料理を思い出さなんだ、どんな味だったっけってな。」 極限の経験をしたものでないかわからない飢えへの考察。

どうしてマーロウの乗っている舟の操舵手が人食いたちに食われなかったのか？マーロウは一人で人食いは多数いるのに？人食いのルールに反しているからでは？あ、そういえば殺人して冷蔵庫にばらばらにした死体を入れて食べていたやつがいたな、と独特の経験を披露されて、どんどん読書会は軌道を失う。うん、自由な発言は無軌道になりがち。でも内容がすごすぎて、むしろ興味津々。

最後の感想をきくと「抽象画みたいだったな。人によって違う画に見える。どうしてこの人にそれが見えて私には見えないんだろう」なかなか深い洞察で終わる。

しかしスーパーボウルがあったら、受刑者たちはそれどころではないので宿題（読んでくること）はできない。

**ブコウスキー『くそつたれ！少年時代』**ではヘンリーが図書館の存在を知って、本を読むようになり、理解する「切れ味の鋭い言葉は、読者の心を躍らさずにはおかない。彼の作品を読み、その魔術にすっかり心を預けてしまえば、自分の身に何が起ころうと、苦痛を少しも感じることなく、希望を持って生きていくことができた」ここに線をひいているチャールズ、「読書は生きていることをより強く実感させてくれる。外で働けなくなってから、読書だけがここから離れる手段なんだ。面白い本を読んでいる間は、少なくとも頭の中では刑務所の外にいるから」

**シェークスピア『マクベス』** 魔女は悪い？いや「オズの魔法使い」のグリンダ、「奥さまは魔女」のサマンサ、「かわいい魔女ジニー」だっていいやつらだぜ。 魔女はどうしてマクベスを選んだ？影響されやすいから？

真実を告げ、些細なことで心をそそり、最後に最大の裏切りを食らわせるのだー「法廷じゃ、昔から使われてる手だ。向こうは最初は同意できることから始めるから、こっちははい、その通りですって言う。で、最後の最後に嘘が加わるんだよ。あっと思ったときにはそのとおりですって言うちまってるってやつだ」とドナルド。

これほど殺人を実感できる人たちと『マクベス』を読んだことはなかった教授。戦場がないところで人を殺せたのは女がいたからだ。 マクベスはきつと女のせいにする。とマクベス夫人の肝がすわっているところとマクベスの弱さを挙げる受刑者たち。

**ステーブソン『ジキル博士とハイド氏』**を読んで同僚の、新入りのまともそうな態度に騙されて、自分が眼医者に行く時間に持ち物をすべてかっぱらわれた話をしたり（自霧博士だと思っていたら背を向けた途端、ハイド氏に変身していたんだ

**ポー『黒猫』** 可愛がっていた猫を看守に殺された話、猫の死がい8個の携帯電話を入れてムシヨに放り込んだ話、「猫のせいで奥さんを殺したと言ってる。こいつは狂ってる」「弁護士次第じゃないか」本当に小説以上に刑務所の人たちが語る現実の方が興味深い。

**カフカ『変身』** ある朝、虫になっていたグレーゴル。ある朝コンクリートの壁に閉じ込められて寄生虫のように扱われる俺たち。そっくりだ。

グレーゴルは最初から虫のグレーゴルだったんじゃないか。働きアリみたいに。ひたすら手段のために働くやつだよ。グレーゴルには個人としての人格がなかった。たぶん昔はあったんだろうけど、押しつぶされたんだろう。

**ナボコフ『ロリータ』** インテリのハンバートの語り口に全く幻惑されず、みんなが12歳の少女ロリータの心配をする。

刑務所の中のプライバシーのなさや、不自由な待遇に対照的な映画『マイケル・ムーアの世界征服のススメ』を思い出しかつ、どんな人生を送ってしようと真実に近づこうとするものにはそれなりの見識が与えられるのだと思っただ。重刑者が多いなか、2名が出所がかなうのだけれど、その後も古典を楽しむかといえば、そんなことはなく、人生のほかの楽しみを享受していたというあとがき。なかなかシニカルで、現在の読書離れに頭を抱えている状況と共通している気がした。